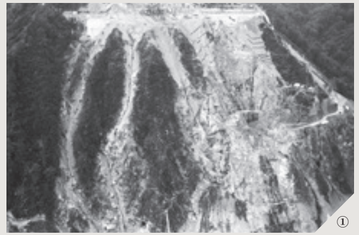
消滅した生活の記憶と銀山湖の底にあるもの

斎藤友子
（アニメーション／サウンドプロデューサー）


①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

1958年～1960年の魚沼地域を取材した、いち新聞記者の記録写真と新聞記事

あるご縁により、この度、約60年前に父が撮影したネガをアーカイブ化していただく事になった。30年以上前に亡くなった父は新潟日報の新聞記者だった。アーカイブ化して頂いた事で、初めて見ることができた父の写真には、当時の父の記憶が焼きついていた。父の小出支局時代の報道写真である。そもそも、父が亡くなって以降、60年前のネガを、私が大切に保管してきたのは理由があった。私が中学時代に父から聞かされた、一人の男性の話が頭から離れなかったためだ。その男性は、奥只見ダム完成時には、住んでいた山地の居住地が沈むため、保証金と引き換えにそこから出た。その保証金は、長岡で芸者と懇ろになったあげく使い果たしてしまい、再び山に戻り、ダムで沈むかつての居住地からさらに奥地に自分の住まいを求めたらしいが、結局どうなったのかその後を知る人もいず、山から落ちて亡くなったらしいとの噂が立った、という一人の元マタギの話だ。当時、ダムに全く興味のなかった私は、奥只見ダムの銀山湖底に、人が生活した場所が沈んでいる事をその時に初めて知った。そして父から聞いた男性がそのまま湖の中に沈んでいるかのような強烈な印象を持った。この時の衝撃が何を意味するのか、父の写真からようやく一つ一つ紐解くことが出来る。今回は、その中から数枚、父が書いた新聞記事の内容と合わせてご紹介したい。

ダムは巨大な建造物だ。そして、写真にもあるようにどうしても自然を一度破壊した上でないと建設は出来ない。そして奥只見ダムは、豪雪というダム工事がかつて経験した事のない大自然とも闘った。その工事の様子の写真も存在していた中の数枚。（写真①～③）山肌の右奥手がダムにより水没する地域だ。その水没した銀山平、波拝が沈む前の写真が存在していた。④から⑥は元波拝分校や銀山平の鉱山で昔おきた水難事故で亡くなった方の供養（写真では旧字）塔と墓石だ。すべて今は銀山湖の底だ。そして、ハイカーたちの唯一のいこいの場であったであろう銀山荘は、留守番の人と4人の木こり達が《最後の住人》となったそうだ。（写真⑦）

奥只見ダムで発電される電気は、東京にも向かう。厳冬の中で、送電線の被害調査をするため越冬して試験・観測をする試験所が、雪氷試験に最適であった枝折峠にあった。着氷と電流の関係など調査されたらしい。調査員はいずれも東京出身で、枝折峠の冬の悪天候の中、命がけの測定を続けたそうだ。このように住み慣れた土地から移転してくれた人達や、ダム建設や調査・研究を命をかけて行った人たちのおかげで東京は沢山電気を消費する事が可能になったのだ。（写真⑧）

そして、建設中の奥只見ダムより北にある広神村手ノ又（現在は在住者なし）では、この写真⑨が撮影された昭和35年、豪雪で本校に行けないため、雪が消える5月まで、村にいる農業本職の代用教員が子供達の先生だった。先生は週一回、子供たちのために山を超え、分校に連絡に行っていたという。〝父ちゃん先生〟手作りの山の神「十二さま」お祭りの弓が生きた教材、春になるのが待ち遠しい子供達。全戸数3戸の中の、父ちゃん先生の家の屋根裏に黒板と机ふたつの小中学校。ちなみにここに電気がきたのは、昭和37年頃らしい。

入広瀬村の浅草岳の原生林から樹齢300年以上のブナを切り出す木こりたち。平石川の渓谷をトロで大白川の貯木場にスリル満点で運んだそうだ。トロの音でヘビが這い出て、熊も前を横切ったらしい。（写真⑩）現在は、ブナ林は保護され伐採は行われていないようだ。このように、今はなくなってしまった日常生活の記録写真も多い。先に書いた元マタギの男性の生きた日常感覚を思い起こし、新たな記憶として未来に繋げていく事が、父が残し、私に写真を託した意味になるのかもしれない。

⑨

⑩